

Claude Opus 4.6をめぐる「高度なチャットbot」から「自律エージェント」への転換の実態と含意

エグゼクティブサマリー

提示文（「これまでのAI＝高度なチャットbot」→「Claude Opus 4.6＝自律的に複雑タスクを片付けるエージェント」）は、誇張を含み得る一方で、“技術的にその方向へ踏み込んだ”こと自体は一次情報から裏づけられる。Claude Opus 4.6は、(a) 長時間・多段の作業を維持する能力、(b) 大規模コンテキスト（200K、βで1M）、(c) ツール利用・コンテキスト管理（Compaction、Memory等）、(d) マルチエージェント運用（Agent Teams）を要素として、従来のチャット中心UXから「ファイル・ツール・組織のワークフローへ接続する実行系」へ重心を移している。¹

同時に、一次情報は「全投げ」を無条件に肯定していない。Anthropic自身のサボタージュ・リスク報告は、Opus 4.6を“高度に有能だが完全に信頼できるわけではない”と明記し、リスクを“非常に低いがゼロではない”と評価する。したがって、ビジネス導入では (1) 自律度の段階設計（権限・監督）、(2) エビデンス（引用・ログ）、(3) データ保護、(4) 契約・SLA、(5) 評価と監査を統合した運用が不可欠である。²

市場面では、メディアは「知識労働へ拡張」「プロダクション品質に近づく」点に注目し、企業導入チャネル（例：GitHub³上のCopilotでの提供）も進む。これは、短中期的に「SaaS機能のエージェント置換」や「業務プロセスの再設計」を伴う競争圧力を高める可能性がある。⁴

背景と論点

提示文が指す「衝撃」を、分析的に分解すると論点は3つに整理できる。第一に、LLMが“会話生成”から“作業遂行（実行・反復・検証）”へ重心移動しているか。第二に、その移動がどの程度、実運用に耐える再現性（品質・監査可能性）を持つか。第三に、その結果としてソフトウェア/知識労働市場の価値連鎖（SaaS、BPO、SI、監査、セキュリティ）がどう変わるか、である。⁵

この転換は、単にモデル性能だけでなく「エージェントを成立させる周辺機能（ツール利用、メモリ、コンテキスト管理、実行ループ）」の整備で進む。Anthropicは「Claude Agent SDKがClaude Codeと同等のツール群・エージェントループ・コンテキスト管理を提供する」と明示しており、“チャット”よりも“業務実行基盤”としての設計が中心にある。⁶

この流れは利用実態にも現れる。Anthropicの経済分析レポート（アブストラクト公開）では、ユーザーがClaudeにより自律的に仕事を委ねる「指示・委任」スタイルが増加した旨が報告されている（27%→39%）。⁷

timeline

- title エージェント化を支える周辺機能とリリースの流れ（公開情報ベース）
- 2025-10 : Claude Developer PlatformでMemory tool (β) / Context editing等が言及
- 2025-11 : Claude Opus 4.5 (system card一覧の月次表記)

2026-02-05 : Claude Opus 4.6 公開 (1M context β / Agent Teams 等)

2026-02-05 : OpenAI の GPT-5.3-Codex 公開 (エージェント型コーディング)

(Memory tool等の時系列は開発者向けリリースノート、Opus 4.5/4.6はsystem card一覧と公式発表、GPT-5.3-Codexは公式発表に基づく。) ⁸

Claude Opus 4.6の主要機能と前バージョンとの差分

以下は一次情報に基づく整理であり、パラメータ数や学習データ詳細など、公開されていない属性は「不明」とする (多くのフロンティアモデル同様、モデル内部仕様の全面公開は行われていない) 。 ⁹

自律性と長時間タスク維持

公式発表は、Opus 4.6が前バージョン (Opus 4.5) よりも「より慎重に計画し、エージェント的タスクをより長く継続し、大規模コードベースでより安定、レビュー/デバッグで自己誤りを捕捉しやすい」点を中核の改良として挙げる。 ¹⁰

この「自律性」を具体化する周辺実装として、Anthropicは研究プレビューの“Agent Teams”を提示し、複数インスタンスが並列に共有コードベースへ貢献する枠組みを説明する。 ¹¹

特筆すべきは、エージェントの“実在感”を演出するのが文章生成ではなく**実行ループ (タスク→テスト→修正の反復)**である点だ。Anthropicの技術記事では、Agent TeamsでCコンパイラを構築した実験 (約2,000セッション、費用約\$20,000、10万行規模の成果物等) が報告され、同時に限界 (品質・回帰・設計上の妥協) も述べられる。 ¹¹

マルチステップ計画と推論制御

Claude 4.6世代では「アダプティブ思考 (thinking: adaptive)」が推奨モードとされ、モデルが“いつ/どれだけ考えるか”を動的に調整する。従来型の `thinking: enabled` と `budget_tokens` は非推奨となり、代替として `effort` パラメータ (GA) が提示される。 ¹²

これは、エージェントが多段計画を遂行する際の「推論の深さ (コストと品質)」を設定で制御する設計であり、「**チャットの賢さ**」ではなく「**業務の遂行手続き**」に近いパラメータ体系へ寄せている。 ¹³

外部ツール連携と実行系 (tool use / code execution / computer use)

Claudeプラットフォームは、ユーザー/システムの目的達成のためにツールを呼び出す標準手順 (`tool_use stop_reason`等) を仕様化している。 ¹⁴

さらに、Anthropicは「高度なツール利用」として、モデルが逐次ツールを呼ぶのではなく、**ツール呼び出しを含むコードを書いて並列・条件分岐付きで実行し、コンテキストへ入れる情報量も制御できる**

(Programmatic Tool Calling) 方向を示している。 ¹⁵

加えて、Claude 4.6では「きめ細かいツールストリーミング」がGA化され、長い作業を“途中経過つきで運用”しやすくする方向 (監督・介入の設計) も示される。 ¹²

長期記憶・コンテキスト管理 (Compaction / Memory / Files)

Opus 4.6の“長期記憶”は、一般的な「個人プロフィールを永続保持する内蔵メモリ」と同義ではない。一次情報に基づけば、主に2系統である。

- **Compaction API (β)** : 会話がコンテキスト上限に近づくと、サーバー側で過去を要約し、事実上の長期対話を可能にする。 ¹²
- **Memory tool (β)** : 会話間で情報を保存・参照するための仕組みで、ベータヘッダーを要し、メモリのバックエンド（ファイル/DB/クラウド/暗号化ファイル等）はクライアント側で実装する。 ¹⁶

ドキュメント処理の実務面では、PDFをURL/BASE64/Files APIのfile_idで渡す方法が公式に説明される一方、特定APIでは「PDFの画像や図表が見えない」など既知制約も言及されている。 ¹⁷

このため「何時間かかるドキュメント分析の全投げ」は、**入力経路・引用 (citations)・図表扱い・要約戦略**まで含めて設計しないと期待値を外しやすい。 ¹⁸

セーフガードと安全性評価

公式発表および報道では、Opus 4.6に対し「過去最大規模の安全性テスト」を実施した旨や、危険依頼の拒否・隠密な有害行動などの評価を強調している。 ¹⁹

またAnthropicは、サボタージュ・リスク報告で「危険な一貫した誤整合目標はないと考える」「全体リスクは非常に低いが無視できない」と評価し、監視とセキュリティ統制を含む緩和策の枠組みを提示する。 ²⁰

ユースケース別の期待効果と限界

この節では、(A) なぜOpus 4.6で“全投げ感”が増すのか、(B) どこで破綻しやすいのか、を業務類型別に分けて述べる。前提として、Anthropic自身が「高度に有能だが完全に信頼できるわけではない」点を明言しているため、**自律性の設計＝品質保証・監査設計**である。 ²¹

プログラミング (設計・実装・レビュー・デバッグ)

期待効果：公式発表は、計画性・大規模コードベースでの信頼性・レビュー/デバッグ能力向上を主張する。 ¹⁰

またAgent Teamsの実験報告は、長期ループとテストハーネスを組み合わせることで、大規模成果物を生成し得ることを示した（※ただし高額コスト・限界も併記）。 ¹¹

加えて、GitHub ³ のCopilotでOpus 4.6が提供され、エージェント的コーディング（計画・ツール呼び出しが必要な難タスク）での強みが“早期テスト”として言及されていることは、実装現場への浸透経路を強める。 ²²

限界：Cコンパイラ実験でも、回帰・設計妥協・最終品質の不足が明記され、「テストが通った＝十分」ではない不安が述べられる。 ¹¹

従って“全投げ”は、(1) テストの質、(2) CI/静的解析、(3) 変更差分のレビュー、(4) 権限（本番デプロイ/秘密鍵/支払い等）の制限、(5) 失敗時のロールバック、が揃って初めて現実的になる。 ²³

ドキュメント分析 (法務・金融・技術ドキュメント)

期待効果：200Kコンテキスト、βで1Mコンテキストにより、複数文書や大部資料を“同一作業単位”で扱える範囲が拡大する。 ²⁴

加えてCompaction APIは、長時間の調査・対話を要約で継続させる仕組みとして提供される。 ¹²

限界：PDF取り込みは手段が複数ある一方、APIによって図表の扱いに制約があるなど、“ファイルを渡せば終わり”ではない。¹⁷

また、Anthropicのリスク報告は「幅広いタスクで有能だが完全に信頼できるわけではなく、確実にできるタスクはより小さい集合」と述べるため、重要判断（法務結論、財務数値、規制解釈）の“最終責任の置き場”を設計しない運用は危険である。²⁰

データ抽出・調査（表の抽出、論点整理、根拠提示）

期待効果：ツール利用（検索、社内DB、スクリプト実行等）を組み合わせると、抽出→整形→検証→報告の流れを自動化しやすい。Claudeのcode execution toolは、ツール統合を“実行コンテナ内のコード”としてオーケストレーションし、コンテキストに入れる情報量も抑制できる方向を示す。²⁵

限界：抽出結果の正しさは、(1) 元データの品質、(2) 参照の可観測性（引用・ログ）、(3) ツール結果の改ざん耐性、に依存する。サボタージュ・リスク報告が“組織内で強い権限（affordances）を持つモデル”を脅威モデルとして定義している点は、データ抽出の自動化がそのまま統制対象になることを示唆する。²⁰

ワークフロー自動化（チケット処理、社内オペレーション、IT運用）

期待効果：エージェントSDKは、ファイル読み書き・コマンド実行・Web検索などを含む“実行ループ”を提供することを明言しており、定型オペレーションの自動化に直結する。²⁶

またCoworkは「ローカルで動作し、フォルダ内のファイルを読み・整理・作成する」点を特徴として掲げ、業務環境への直接接続を前面に出す。²⁷

限界：運用を誤ると、(1) 誤操作（削除・書き換え）、(2) 情報漏えい（権限過大）、(3) 監査不能（ログ欠落）、(4) コスト暴走（長時間推論・長文入出力）の形で損失が拡大する。価格例・ツールの追加トークン負担・長文課金体系は公式資料に明示されているため、設計段階でFinOpsが必要になる。²⁸

市場反応と短中期のビジネスインパクト

反応の構図（投資家・企業導入・メディア・コミュニティ）

メディアは、Opus 4.6を「知識労働へ拡張」「ドキュメント/スプレッドシート/プレゼンの初回品質向上」など、従来の“コーディング強者”の枠を超える動きとして描写する。¹⁹

日本語圏でも、Coworkを含む業務エージェント文脈と株価反応を結びつけて報じる例がある。²⁹

また、開発者コミュニティでは、長文コンテキストやAgent Teams、セキュリティ能力（脆弱性発見）などを“非連続な進化”として受け止める論調が見られる。³⁰

企業導入の観点では、GitHub³ CopilotでOpus 4.6が展開されることは、モデルの普及が「単体API」ではなく「既存開発プラットフォームの機能選択」に埋め込まれることを意味する。²²

投資家反応としては、Cowork等の“知識労働の自動化”がSaaS（特に法律・業務支援）の収益モデルを揺さぶる懸念が報じられ、株価下落と結びつけられた。³¹

短中期インパクト予測（分析）

一次情報・報道から導かれる短中期（概ね6～18か月）の含意は、次の3点に集約される（予測であり不確実性を含む）。

第一に、「SaaS機能」対「エージェント実行」の置換圧力が増す。Coworkのようにファイル環境へ入り込む製品が増えるほど、従来UIの価値は“最終成果物”ではなく“統制・監査・責任分界”へ移る。 ³²

第二に、“全投げ”はBPOではなく「テストとガバナンスを含む自動化内製」へ向かう可能性が高い。Agent Teams実験が示す通り、成果は「モデル」よりも「テストハーネス/環境設計」に依存し、ここが競争優位になる。 ³³

第三に、セキュリティ市場の再編である。AnthropicはOpus 4.6が500件超の高深刻度脆弱性を“検証済みで発見・修正支援している”と述べ、攻防双方の能力上昇を示唆する。守り側が先に自動化を取り込めるかが、短期の差になる。 ³⁴

競合比較

比較は「モデル単体」ではなく、(1) 自律実行の設計思想、(2) ツール・メモリ・運用機能、(3) 価格体系、(4) セキュリティ/コンプライアンス、の組で見る必要がある。 ³⁵

提供主体/主要製品	自律性（長時間・計画）	ツール連携	長期記憶	セキュリティ機能（例）	価格帯の目安（公表ベース）
Anthropic ³⁶ (Claude Opus 4.6)	アダプティブ思考・effortで推論量を制御し、長時間のエージェント作業を想定	tool use、code execution、Agent SDK、Claude Code 等	Compaction (β)、Memory tool (β・バックエンド実装必要)	サボタージュ・リスク評価、監視/統制の枠組みを提示	入力\$5/100万 tokens、出力\$25/100万 tokens（長文は別レート。Batch割引あり）
OpenAI ³⁷ (GPT-5 / GPT-5.3-Codex)	GPT-5は長文/高出力、GPT-5.3-Codexはエージェント型コーディング志向	Codexは研究・ツール利用・複雑実行を想定（公式説明）	APIでの“永続メモリ”は製品/設計に依存（要個別設計）	サイバー領域の安全配慮や枠組みを提示	GPT-5：入力\$1.25、出力\$10（/100万 tokens）。CodexはAPI価格参照＋クレジット型枠も併存
Google ³⁸ (Gemini 3 Pro / Flash)	1M級コンテキストを前提に推論機構を提供	Gemini API/Vertex AIで利用（関数呼び出し等はAPI仕様に依存）	持続メモリは一般に外部ストレージ連携で実装	価格・レート制限やthinking課金の明示	Gemini 3 Pro：入力\$2/出力\$12（≤200K）、入力\$4/出力\$18（>200K）（/100万 tokens）

提供主体/主要製品	自律性（長時間・計画）	ツール連携	長期記憶	セキュリティ機能（例）	価格帯の目安（公表ベース）
Meta Platforms ³⁹ (Llama 4)	オープンウェイト中心で、実運用の自律性はフレームワーク側で構成	ツール連携は運用基盤依存（自前/ベンダー）	同上（外部実装）	Llama Guard等の保護ツール拡充を公表	価格は推論基盤（自前GPU/クラウド/各社API）に依存（Metaとしての一律従量課金は示しにくい）
Mistral AI ⁴⁰ (Devstral 等)	コードエージェント用途を明示したモデル群	function calling等を公式ドキュメントで提供	永続状態はエージェント実装依存	ガードレール/モデルレーション等は製品体系に依存	Devstral 2：入力\$0.4/出力\$2（/100万tokens）

（表の根拠：Claudeの機能/価格は公式ドキュメント、OpenAIは公式紹介・価格、GoogleはGemini API公式モデル表、Metaは公式ブログ/ライセンス、Mistralは公式モデルカード/ドキュメントに基づく。なお「長期記憶」は多くの製品で「外部ストレージ連携で実現する設計」が一般的で、内蔵の永続メモリの有無は提供形態に依存する。）⁴¹

倫理・法的・セキュリティ上の懸念

誤情報と責任所在

エージェント化は「誤情報」を“会話の誤り”から“業務プロセスの誤り（ファイル改変・システム操作・意思決定汚染）”へ拡張する。Anthropicのリスク報告は、強い権限（affordances）を持つ組織内利用を脅威モデルに置き、全リスクを「非常に低いが無視できない」と評価している。²⁰

したがって、責任は「AIが間違えた」で終わらず、(1) 誰が承認したか、(2) どの証拠に基づくか、(3) どの権限で実行したか、をログで再構成できる体制が必要となる。⁴²

データプライバシー（プロンプト/添付/ログ）

日本では、生成AIサービス利用について個人情報保護委員会⁴³が注意喚起を公表しており、プロンプトや入力データの扱いが法務・ガバナンス上の論点になる。⁴⁴

また総務省⁴⁵・経済産業省⁴⁶の「AI事業者ガイドライン」は、AIのライフサイクル全体でリスク緩和とイノベーション促進の両立を掲げ、共通指針（プライバシー保護、セキュリティ確保、透明性、アカウントビリティ等）を明示する。⁴⁷

ここで重要なのは、エージェント運用ではログと監査が不可欠になる一方、そのログ自体が機微情報の集積になり得る点である（保管期間、アクセス制御、マスキング方針が必須）。⁴⁸

悪用リスク（サイバー・業務妨害）

Anthropicは、Opus 4.6が「高深刻度の脆弱性をスケールして発見し得る」局面に入ったと述べ、実際に500件超を検証し報告・修正協力しているとする。防御能力の増大は、攻撃者にも同様の能力が利用され得ることを意味するため、最小権限・分離環境・検知/監視がより重要になる。³⁴

規制対応（EUを含む域外要件）

EUでは一般目的AI（GPAI）モデル提供者の義務が2025年8月から適用される旨が欧州委員会資料で整理されており、域内展開や域内データを扱う企業は、透明性・著作権・安全性などの対応を要する。⁴⁹
ガバナンス標準としては、ISO⁵⁰がAIマネジメントシステム規格（ISO/IEC 42001）を提示しており、規制“前”の説明責任整備として参照されやすい。⁵¹

導入時の実務的留意点と推奨アクション

コスト見積もりの要素（モデル料金・長文課金・推論量・ツール負担）

Claudeの価格体系は、(1) 入力/出力単価、(2) 長文（>200K）でのプレミアムレート、(3) Batch割引、(4) ツール利用によるトークン増（例：computer useのシステムプロンプト上乘せ等）、(5) 推論量（thinking tokens＝出力課金）で決まる。⁵²

また、1Mコンテキストはβであり、利用ティア等の条件が付く。これを前提に業務設計すると、環境差による失敗（本番で使えない/高額化）を招く。⁵³

推奨：最初に「1タスクあたりの平均入出力」「想定エージェント反復回数」「ツール呼び出し頻度」「長文の発生確率」を測り、月次上限（spend limits）とレート制限を運用設計に落とす。⁵⁴

運用体制（人間の関与点・権限設計・監督）

エージェントの自律度を一律に上げず、段階を切ることが現実的である。

flowchart TD

```
A[業務要求] --> B[入力整形・機微情報マスキング]
B --> C[エージェント実行：計画→ツール→観測→反復]
C --> D{高リスク判定?}
D -- Yes --> E[人間レビュー/承認<br/>法務・セキュリティ・業務責任者]
D -- No --> F[自動反映（限定権限）]
F --> G[監査ログ保管・評価]
E --> G
G --> H[継続改善：プロンプト/テスト/権限制御/コスト最適化]
```

（上記は、AI事業者ガイドラインが示すガバナンス/アカウンタビリティ志向と、NISTのリスク管理の一般枠組みを、エージェント運用に写像した参照モデルである。）⁵⁵

実装上の鍵は「権限（ファイル操作、実行コマンド、外部送信、支払い等）」を最小化し、ツール結果とモデル出力をログとして保持し、後から再現可能にすることだ。⁵⁶

監査・ログ（証拠性と再現性）

- ・入力（プロンプト/添付）・出力（最終成果物）だけでなく、ツール呼び出し履歴と結果を保存する。⁵⁷

- ・長時間対話ではCompactionやメモリが介在するため、「要約後に何が失われ得るか」を前提に、重要根拠（条文、数値、出典）は別途固定化する。⁵⁸

- ・β機能は「as-is」でSLAが安定機能と同等でない可能性が明示されるため、監査上は“β依存の業務”を切り分ける。⁵⁹

ユーザー教育（“全投げ”の前提条件を共有する）

Claudeのプロンプト設計ガイドは、Claudeを「非常に優秀だが新しい従業員（記憶がない）」として扱い、明確で直接的な指示を推奨している。教育は、(1) 指示の粒度、(2) 期待アウトプットの定義、(3) 根拠の要求、(4) 失敗時のエスカレーション、を標準化する方向が望ましい。⁶⁰

SLAや契約条項で確認すべき点（実務チェックリスト）

一次情報ベースで最低限確認すべきは、(a) 可用性の見える化、(b) 優先処理/ティア、(c) β機能の扱い、(d) データ処理/保持、である。

- ・**可用性**：ステータスページで90日稼働率が公開され、直近のインシデントも記録される（運用品質の“事実”として参照できる）。⁶¹
- ・**ティア**：Priority Tierが「高可用性（目標99.5%稼働）」等を掲げる一方、どの範囲が契約対象かは確認が必要。⁶²
- ・**β機能**：βヘッダー機能（Memory/Compaction等）は“同等SLAでない可能性”が明示されるため、法務・監査上の扱いを契約で整理したい。⁶³
- ・**データ保護**：国内では個人情報保護委員会⁴³の注意喚起、社内ではAI事業者ガイドラインに整合する運用（保存、目的外利用、第三者提供、越境移転、委託先監督）を条項へ落とす。⁶⁴

企業が取るべき戦略的ステップ（推奨アクション）

結論として、「衝撃」は“モデルが賢くなった”よりも、「**自律的に動かせる条件が揃い始めた**」ことにある。従って推奨アクションは、モデル選定より先に「自律性の統制設計」を置くべきである。⁶⁵

第一に、**エージェントが価値を出す業務を選別**する。長文・反復・複数ツールが必要な領域（コードモダンイズ、監査証跡付きの文書レビュー、チケット分類/一次対応など）から始める。⁶⁶

第二に、**テスト/検証ハーネスとログを“成果物”として先に作る**。Agent Teams実験が示す通り、テスト品質が自律性の上限を決める。¹¹

第三に、**ガバナンスとコンプライアンスを同時に立ち上げる**。日本のAI事業者ガイドライン、NISTの生成AIリスク管理、EUのGPAI義務などを参照し、AI利用を“監査可能な業務プロセス”にする。⁶⁷

第四に、**攻防両面のセキュリティ戦略を更新**する。脆弱性探索が自動化される局面では、修正速度・依存関係管理・SBOM/脆弱性対応の運用成熟度が競争力になる。³⁴

以上より、Claude Opus 4.6が示したのは「全投げ可能な万能AI」の到来というより、“**全投げに近い委任**”を可能にする条件（長文・推論制御・ツール/メモリ・マルチエージェント・監督設計）が揃い始めたという、業務設計の転換点である。⁶⁸

¹ ⁵ ⁹ ¹⁰ ⁶⁸ <https://www.anthropic.com/news/claude-opus-4-6>
<https://www.anthropic.com/news/claude-opus-4-6>

² ²⁰ ²¹ ³⁸ ⁵⁶ <https://anthropic.com/claude-opus-4-6-risk-report>
<https://anthropic.com/claude-opus-4-6-risk-report>

³ ³⁴ <https://red.anthropic.com/2026/zero-days/>
<https://red.anthropic.com/2026/zero-days/>

- 4 19 <https://www.theverge.com/ai-artificial-intelligence/874440/anthropic-opus-4-6-new-model-claude>
<https://www.theverge.com/ai-artificial-intelligence/874440/anthropic-opus-4-6-new-model-claude>
- 6 26 35 36 43 65 66 <https://platform.claude.com/docs/en/agent-sdk/overview>
<https://platform.claude.com/docs/en/agent-sdk/overview>
- 7 <https://arxiv.org/abs/2511.15080>
<https://arxiv.org/abs/2511.15080>
- 8 <https://platform.claude.com/docs/en/release-notes/overview>
<https://platform.claude.com/docs/en/release-notes/overview>
- 11 23 33 <https://www.anthropic.com/engineering/building-c-compiler>
<https://www.anthropic.com/engineering/building-c-compiler>
- 12 13 24 39 41 45 58 <https://platform.claude.com/docs/ja/about-claude/models/whats-new-claude-4-6>
<https://platform.claude.com/docs/ja/about-claude/models/whats-new-claude-4-6>
- 14 37 <https://platform.claude.com/docs/en/agents-and-tools/tool-use/overview>
<https://platform.claude.com/docs/en/agents-and-tools/tool-use/overview>
- 15 <https://www.anthropic.com/engineering/advanced-tool-use>
<https://www.anthropic.com/engineering/advanced-tool-use>
- 16 <https://platform.claude.com/docs/ja/agents-and-tools/tool-use/memory-tool>
<https://platform.claude.com/docs/ja/agents-and-tools/tool-use/memory-tool>
- 17 18 46 50 <https://docs.anthropic.com/en/docs/build-with-claude/pdf-support>
<https://docs.anthropic.com/en/docs/build-with-claude/pdf-support>
- 22 57 <https://github.blog/changelog/2026-02-05-claude-opus-4-6-is-now-generally-available-for-github-copilot/>
<https://github.blog/changelog/2026-02-05-claude-opus-4-6-is-now-generally-available-for-github-copilot/>
- 25 <https://platform.claude.com/docs/en/agents-and-tools/tool-use/code-execution-tool>
<https://platform.claude.com/docs/en/agents-and-tools/tool-use/code-execution-tool>
- 27 32 <https://claude.com/resources/tutorials/claude-cowork-a-research-preview>
<https://claude.com/resources/tutorials/claude-cowork-a-research-preview>
- 28 52 53 <https://docs.anthropic.com/en/docs/about-claude/pricing>
<https://docs.anthropic.com/en/docs/about-claude/pricing>
- 29 https://ledge.ai/articles/anthropic_claude_opus_4_6_cowork_saas_stock_reaction
https://ledge.ai/articles/anthropic_claude_opus_4_6_cowork_saas_stock_reaction
- 30 <https://zenn.dev/galirage/articles/claude-opus-4-6>
<https://zenn.dev/galirage/articles/claude-opus-4-6>
- 31 <https://www.reuters.com/business/retail-consumer/anthropic-releases-ai-upgrade-market-punishes-software-stocks-2026-02-05/>
<https://www.reuters.com/business/retail-consumer/anthropic-releases-ai-upgrade-market-punishes-software-stocks-2026-02-05/>
- 40 59 63 <https://platform.claude.com/docs/en/api/beta-headers>
<https://platform.claude.com/docs/en/api/beta-headers>

42 47 55 67 https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ai_shakai_jisso/pdf/20250328_2.pdf
https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ai_shakai_jisso/pdf/20250328_2.pdf

44 64 https://www.ppc.go.jp/news/careful_information/230602_AI_utilize_alert
https://www.ppc.go.jp/news/careful_information/230602_AI_utilize_alert

48 <https://www.nist.gov/itl/ai-risk-management-framework>
<https://www.nist.gov/itl/ai-risk-management-framework>

49 <https://digital-strategy.ec.europa.eu/en/policies/guidelines-gpai-providers>
<https://digital-strategy.ec.europa.eu/en/policies/guidelines-gpai-providers>

51 <https://www.iso.org/standard/42001>
<https://www.iso.org/standard/42001>

54 <https://platform.claude.com/docs/en/api/rate-limits>
<https://platform.claude.com/docs/en/api/rate-limits>

60 <https://platform.claude.com/docs/ja/build-with-claude/prompt-engineering/be-clear-and-direct>
<https://platform.claude.com/docs/ja/build-with-claude/prompt-engineering/be-clear-and-direct>

61 <https://status.claude.com/>
<https://status.claude.com/>

62 <https://platform.claude.com/docs/en/api/service-tiers>
<https://platform.claude.com/docs/en/api/service-tiers>